

工作的の都市 IMPROVISATION CITY / インプロビゼーション・シティ

衰退の先の風景を探すために

コンセプト / 思考のプロセス

□衰退の先の建築を探しに

都市の衰退をテーマにしてみたい。

建築はその職能の性質上、宿命的に都市の建設、拡張、維持に力を注いできた。しかしこれから否応なく、都市の衰退、廃棄、消滅に向き合うことになるのではないかだろうか。この状況下での建築の在り方、衰退の先の建築の可能性を表現してみたいと考えた。

□日本の風景が示す先鋭的な未来

衰退する都市が、これから世界中に出現することになる。

世界の人口は今後も膨脹し続けると予測されている。しかしそれはアジアやアフリカのあるエリアに集中し、逆に今まで長きにわたり成長を遂げてきたヨーロッパや日本、そして中国ですらこの30年で急激な高齢化と人口減少フェイズに突入する。これがもっとも早く、そして先鋭的に現れるのが日本。世界は、ありえるかもしれない自分たちの未来として、日本の風景を見つめることになる。

□被災地の風景が予感させる未来

福島第一原発による被災地で私たちが見た風景は、もしかすると多くの街の30年後を予感させるものだったかもしれない。衰退の時間を一気に早送りしたような風景。報道ではドラマチックに描かれていることが多いが、人々が置き去りにされ、自然に侵食され始めるような風景は、すでに日本のいたるところに存在していることを私たちは知っている。それはドラマチックでも何でもなく、ただ淡々と、ゆるやかに進行する日常の延長。

実は、多くの人はそのことに気がついながら、無意識のうちに被災地の特殊解のなかに封じ込めようとしているのではないだろうか。この展示ではあえて被災地の風景と、日常の延長の風景とを並置し客観化してみたい。

□本能が導く工作

では、衰退の後に残るのは、ただ放置された街なのだろうか？

それとも衰退の先に何かがあるのだろうか？私たちはそこにこそ、次なる建築や都市のイメージを抱いている。

人間の生物としての本能は、なぜか再びそこに分け入り、次なる生成に向けた行動に導くことを歴史は示している。スクウォッティングのように、次の使い手が棲みつくこともある。遺構として保存や修復を行って、歴史的な意味付けを行うこともある。新たな資源の採集場所と捉え、リサイクルに向かうこともある。そしてどの行動も、必ずしも合理性では説明できない。空間と時間とモノに反応し、それらを組み合わせ、新たな居場所や意味を工作し始めている。これらの行動は、人間の本能的な営みのように見える。

この展示では、衰退の先に、やはり人がつくってしまう何か、工作的都市の初源のような風景を示してみたい。

展示内容



愛知県瀬戸市



岩手県釜石市唐丹町



岩手県上閉伊郡大槌町

阿野太一（建築写真家）による衰退の風景を巡る旅と、
そこで撮影された作品群。会場で展示される。



廃屋の部材をコラージュした宿
福岡県北九州市



廃材を収集し加工する製作所
福井県福井市



海辺の漂流物によってつくった店舗
静岡県浜松市



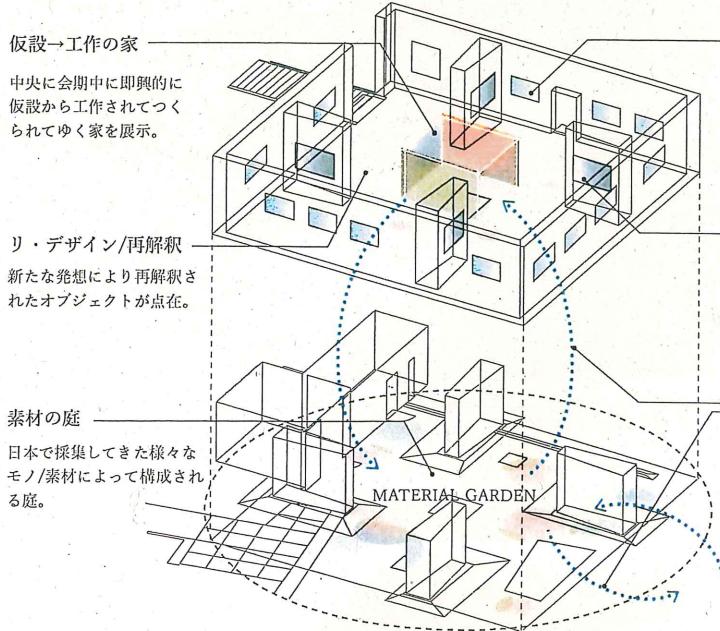
廃棄物を組み上げてつくった橋を海に浮かべた
愛知県岡崎市

デッドストック工務店が日本各地で、採集したゴミを、
現地で即興的に組み上げた作品群。つくられるプロセス自体に演劇性がある。

展示概要 6つの段階 / 行動のプロセス

観察 observation		日本の地方都市の衰退を観察し、記録する。 各地の衰退の中にたたずむ家を、建築写真家・阿野太一が撮影。 そこで起こっている事のリアルを客観化する。 観察者 / 阿野太一
採集 gathering		ある家を解体し、そこから部材、部品、家具、家電、家財道具などを採集。 それらはゴミ、もしくは廃棄物と呼ばれ、焼却されるかそのまま放置される。 これらは土地や家から引き剥がされることによって、いったんは意味を剥奪される。 採集者 / ナカダイ、デッドストック工務店
移送 transportation		採集されたモノたちは、コンテナに詰められ、海を越えてベネチアに移送される。 地理的な、そして時間的な移送によって、 モノたちは文脈から引きはがされるのと引き換えに、 流通材としての自由を得ることができる。
仮設 temporary		日本の典型的なプレファブリケーション住宅の躯体が、 ベネチアの会場で即興的に組み立てられる。 即興的かつ仮設的に見えるが、日本ではこれが標準的な住宅の構造。 そもそも日本の住宅は、あらかじめはかないものなのかもしれない。 仮設者 / 住宅メーカー（大和ハウス、大東建託など想定）
工作 improvisation		採集され、移送されてきたモノたちを解放。再び家へと工作されてゆく。 即興的な日本の住宅構造に、即興的に部材、部品、家具、家電、家財道具が コラージュされることにより、工作的な家が組み上がっていく。 ランダムな記憶の積層のような家。工作的なプロセス自体が観客に公開され、 それは、インプロビゼーションのパフォーマンスのような演劇性を帯びる。 工作者 / デッドストック工務店
循環 circulation		衰退の街の観察、廃棄物の採集から、ベネチア現地で家の工作、そして解体。 その一部は転用され、再びマテリアルよプロダクトとして再生。物質と時間は循環する。 再編集・再流通 / THROWBACK

会場構成



予算概算

出展作品輸送費	¥ 3,000,000
会場構成費	¥ 5,000,000
解体費	¥ 2,000,000
広報費	¥ 1,000,000
カタログ制作費（原稿料・翻訳料含む） (作品集として制作。可能であれば一般流通販売)	¥ 4,000,000
関係者旅費	¥ 2,000,000
設営	¥ 3,000,000
撤収	¥ 3,000,000
保険料	¥ 1,000,000
会場運営費	¥ 12,000,000
謝金	¥ 4,000,000
合計	¥ 40,000,000

キュレーター

馬場 正尊 (建築家 / Open A / 東北芸術工科大学教授)



1968年佐賀県生まれ。

1994年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂で博覧会やショールームの企画などに従事。その後、早稲田大学博士課程に復学。雑誌『A』の編集長を経て、2003年株式会社オープン・エーを設立。建築設計、都市計画、執筆などをを行う。同時期に「東京R不動産」を始める。2008年より東北芸術工科大学准教授、2016年より同大学教授。

近作として「Reビルプロジェクト」(2014-)、「佐賀県柳町歴史地区再生」(2015)、「Under Construction」(2016)など。

近著に『公共R不動産のプロジェクトスタディ』(学芸出版,2018)、『クリエイティブローカル エリアリノベーション海外編』(学芸出版,2017)、がある。2017年より沼津市公園内の宿泊施設『INN THE PARK』を運営。

作成協力



デッドストック工務店

日本各地に散らばるフリーランスの大工・職人・工務店・建築家などの集合体。普段はそれぞれの地方で仕事をしながら、プロジェクトごとに離合集散するネットワーク型のチーム。全員がゴミ／廃棄物を偏愛し、それを持ち寄り、現場において即興的・演劇的に空間を組み上げていく様子はパフォーミングアーツのようでもある、本人たちはそれを表現と考えているわけではなく、ただそこにモノがあるからつくっている。



株式会社ナカダイ

群馬県前橋市を拠点とした産業廃棄物処理企業。毎日60トン以上運び込まれる産業廃棄物のリサイクル率99%以上を誇り、再生可能な産業廃棄物を「ソーシャルマテリアル」と定義し、社会に還元する方法論を開発している。

サーキュラーエコノミー(循環型経済)の最前線にいる企業として注目されている。2017年よりOpenAとともにスローバック・プロジェクトを共同運営。



THROWBACK

ゴミ／廃棄物に手を加え、新たなプロダクトとして再生するアップサイクルプロジェクト。廃棄物の循環実験のためのプラットフォームとして、2017年にOpenAとナカダイによって共同設立された。様々な企業との連携によりゴミを再生したプロダクトを生み出している。

プロジェクトの名称は、THROW(廃棄・投棄したもののが)BACK(戻ってくる)ということを意味。

出展作家

阿野太一 建築写真家

1974年生まれ



北海道大学大学院都市環境工学修了。仕事場を東京に残し2012年より瀬戸市へと移住。建築家の依頼による撮影をする一方、変容する都市の風景を作品として撮影する。瀬戸市中心市街地の活性化にも関わり、PFI事業予定地で2019年9月には「あいちトリエンナーレ」と連携した美術展を企画。

一杉伊織 建築士 / 現場監督 / 建材開発 toolbox

東京在住 静岡県沼津市生まれ



人の残す痕跡に魅了され大学では考古学を専攻。卒業後は京都にて町家の改修作業に従事しながら建築を勉強。古民家再生の設計事務所を経て、東京R不動産の新サイト「toolbox」に合流。リノベーションの設計施工や建材の開発販売を通じ、住まい手主導の空間編集を目指している。デッドストック工務店メンバー。

高藤宏夫 大工 コモン建築事務所

鳥取県鳥取市



高卒で京都のヴィンテージカーレストアショップに修理工として就職、24歳のときに帰郷し大工の柱梁に弟子入り、10年間の修行を経て独立し事務所を設立し木造住宅の設計施工を請け負っている。つくることが最大の喜びでありながら、つくるほどゴミを生み出してしまうジレンマと格闘する日々。デッドストック工務店メンバー。

加藤溪一 建築家 株式会社 HandiHouse project

東京都八王子市



東京都市大学大学院・手塚貴雄研究室修了後、MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO所属。建築家を夢見てそのど真ん中の道を歩むも、もっと作り手と近いところで設計がしたいと思い、独立。HandiHouse projectでは半分オフィスでマウスを、半分現場で工具を手に取り活動中。デッドストック工務店メンバー。

鈴木裕矢 デザイナーときどきカメラマン 空色デザイン / 浜松 PPP デザイン
静岡県浜松市



地方の「何もない」は本当か?新規事業、商品のブランディングも手がけるデザイナー。浜松城公園に7000人が集まるLocal Coffee Fesや、浜名湖でDIY合宿したMikka Beatなども開催。浜名湖のりでつくった巨大なQRコードでギネス世界記録を獲得。デッドストック工務店メンバー。

チーム構成の意図

彼らは地方都市に離散的に住みながら、何かをつくるきっかけがあれば、道具を持って現場に集まり、その場所にある素材やゴミを使って、空間を短時間に組み上げていく。それはまるでジャズセッションのようだったり、状況に対し時に素直な、時にシニカルな即興演劇のようである。

このプロジェクトは、「都市の観察→採集→移送→仮設→工作→循環のストーリー」を、写真家、建築家、大工・職人、産業廃棄物企業で演じる、日本の地方都市とベネチアを舞台にしたインプロビゼーションのパフォーマンスである。

大橋一隆 Open A Ltd./THROWBACK

1977年静岡県生まれ



2003年法政大学大学院建設工学修了後、同年OpenA設立に参画。東京R不動産アートディレクター他、toolboxや泊まれる公園INN THE PARKの立ち上げに参画するなど建築・空間デザインを軸とした幅広い分野で活動中。2017年にTHROWBACKプロジェクトをスタート。

出水建大 大工 株式会社建大工房、CRAFTWORK CENTER

福井県坂井市



両親が経営する工務店が倒産後、独立しリアルホームレスながら工務店として廃材や不要なものを使ってデザインしているうちに、周りで壊されていく古い建物や家具の素材の使い方、ものづくりの在り方にインスピライアされ、地域の廃材を集めたホームセンター「CRAFTWORK CENTER」をオープン。デッドストック工務店メンバー。

松本憲 建築関係者 new&s / 浜松 PPP デザイン

静岡県浜松市



住居、店舗、空間、タイニー・ハウス、コミュニティ、イベント、家具、グッズなど、日々の暮らしを、理想、空想、妄想、木、土、鉄、廃棄物で、人ともくる。5月3日生まれのせいか、ゴミを集めがち。デッドストック工務店メンバー。

坂田裕樹 建築家 株式会社 HandiHouse project

神奈川県横浜市



専門学校卒業後、アトリエ事務所、店舗デザイン事務所に勤務。いがみ合う分業社会の建築界へ不満を共有した仲間と共に、施主と共に家をつくるHandiHouse projectを始めたことで、現場で施工業作をはじめた。デッドストック工務店メンバー。

工藤文紀 塗装屋 塗り labo+

神奈川県川崎市



高校中退後、専門学校の学費を稼ごうとまたま働いた塗装屋の仕事に魅せられ10年就業。離婚をきっかけに上京した東京で会社員を経て独立したのちエイジング塗装、特殊塗装、壁画、アートワーク、モルタル造形等塗装の可能性を求めて活動中。デッドストック工務店メンバー。